

第3回 アートインビジネス研究会 議事録

「伝統産業の源流に学ぶー平安文化を起点として」

テーマ:上賀茂神社と葵祭

講師: 賀茂別雷神社 宮司 高井俊光

日時:2024 年 11 月 8 日(金)18:00~

会場:同志社大学 良心館 経済学部棟 3 階第一共同研究室

第3回アートインビジネス研究会では、「伝統産業の源流に学ぶー平安文化を起点として」をテーマに、賀茂別雷神社（通称：上賀茂神社）と葵祭について、205代目宮司の高井俊光氏が詳細に解説した。上賀茂神社は約2600年前の飛鳥時代に起源を持ち、京都で最も古い神社の一つであり、平安時代の景観が今も保たれていることが特徴である。

本講演は、上賀茂神社の歴史的・文化的意義を多角的に紹介し、平安時代から現代までの変遷や伝統行事の詳細を解説している。特に葵祭の由来や神事の仕組み、幕末の歴史的エピソード、現代の結婚式運営や修復事業の苦労など、伝統産業の源流を学ぶ上で重要な内容を豊富に含んでいる。

上賀茂神社の歴史と文化的意義

賀茂別雷神社は、997年に賀茂在實が初代宮司として文献に登場し、以降205代にわたり宮司職が継承されている。平安時代の著名な人物である紫式部（まひろ）も上賀茂神社に宿泊し、ホトトギスの声を詠んだ歌が新古今和歌集に残されている。また、藤原道長も大病の後に出家し、54歳でこの神社を訪れた記録がある。

794年に桓武天皇が京都に都を移した際、上賀茂神社に参拝し、京都御所の紫宸殿（ししんでん）の位置決定にも関与したとされる。これは、生霊悪霊が、この新しい基盤の目の街を建設するにあたって入ってこないように、新しい街に入ってこないように、京都御所の鬼門、京都御所の紫宸殿の位置は、上賀茂神社が表鬼門になるように定められた。神社が都の鬼門を守る役割を果たすためであった。

桓武天皇様が都をお移しになった794年に、上賀茂神社にすぐにその報告のために参拝、その後歴代天皇も参拝を続けた。

明治天皇も上賀茂神社に参拝し、遺言により亡骸は京都に帰葬された。これに対して東京に建立された明治神宮は、京都への帰葬に異議を唱えた人々によるものである。

幕末の歴史的エピソード

幕末には皇女和宮が徳川家に嫁ぐ前に上賀茂神社へ参拝し、国と民のために身を捧げる覚悟を歌に詠んだ。彼女の江戸への花嫁行列は 50km にも及び、徳川家の威厳を示すために多額の費用が投じられた。

織田信長は競馬（くらべうま）祭りに愛馬を連れて訪れ、2 回の参拝記録が残るが、2 回目は本能寺の変で果たせなかった。信長の参拝にあたっては特別会計が組まれ、鷹狩り用の犬の餌も準備されるなど周到な準備がなされた。

上賀茂神社の現代の役割と活動

現在、上賀茂神社は国家予算の補助を受けつつ修復事業を行い、年に 2 回霞ヶ関での予算獲得交渉を「霞ヶ関の戦い」と呼んでいる。結婚式も年間多く執り行われ、国際結婚の和婚も増加傾向にある。結婚式では自然の風や小鳥のさえずりを感じながら式を挙げることが推奨され、結婚記念日に再訪することで初心に帰る場としての役割を果たしている。

葵祭の概要と伝統

葵祭は京都三大祭りの一つで、1400 年以上の歴史を持つ。天皇陛下の国の安泰と国民の安寧を賀茂大神に祈願する祭りであり、行列は京都御所から出発する。祭りの前日には宮中での儀式が行われ、勅使が上賀茂神社にお供え物と祈願文を届ける。行列の中には偽の勅使が歩き、本物は安全な場所で待機し、儀式の際に交代するという伝統的な作法がある。

葵祭の名称は祭りで飾られる葵の葉に由来し、「アフヒ」という古語は神の霊を意味するとされる。葵は神と人間を繋ぐ重要な草として古くから重視されてきた。

文化財と神事の紹介

上賀茂神社の楼門は国の重要文化財に指定されており、境内の盛砂は陰陽の象徴として神迎えの名残である。神山信仰や紫式部の足跡、夏越の大祓、烏相撲など多様な神事が継承されている。

また、式年遷宮では本殿の修復が行われ、神様の御霊が仮殿に移される儀式が執り行われる。遷宮には巨額の費用がかかり、国産檜を用いた屋根の葺き替えは 10 億円に及んだ。

葵の紋と徳川家の関わり

葵の紋は上賀茂神社の象徴であり、徳川幕府はこれを三つ葉葵として用いた。徳川家は三河の賀茂神社を崇敬し、江戸幕府成立後も毎年葵を献上する伝統が続いた。徳川家光の時代に現在の社殿が建て替えられ、幕府と朝廷の関係を象徴する場面もあった。